『主のことばがあった』（エレミヤ書 1 章 1-10 節）2022.7.3.

＜はじめに＞ それぞれの人生には転機があります。自分の歩みの転機にどんなことがありましたか。そのきっかけは何ですか。

Ⅰ　39 年前の証し

①その頃の私

教会学校教師も楽しく、充実していましたが、人前で語るのは依然苦手でした。教会の奉仕や牧師の手伝いは嫌いではありませんが、牧師には向いていないと思っていました。だから、就職して、一信徒として教会を支えたい、と思って祈っていました。

②みことばをください

最終学年で「就職のためにみことばを与えてください」と祈っていました。主の導きと承認をみことばに見出すためですが、一向にこれというみことばが与えらえません。面接に行く日が迫る中、「とにかくみことばをください」と祈りが変わるほど切羽詰まっていました。

③主のことばがあった

7/3 の朝、聖書通読はエレミヤ書 1 章でした。読み進む中で主が私にも語られ、「わかりました。あなたがそう仰るなら」と受け取って立ち上がりました。その後、エレミヤの生涯と役回りを知るほど、「どうしてですか」と度々尋ねながらも、この聖句に支えられてきました。

Ⅱ　預言者エレミヤ

①出自と時代(1-3)

アナトテはエルサレム北東約 4 ㎞の寒村で、その地の祭司ヒルキヤの子としてエレミヤは育ちました。南ユダ王国のヨシヤ王は宗教改革を推し進める中、彼は預言者として活動開始し(BC627 頃)、バビロンによるエルサレム陥落後まで奉仕しました(BC583 頃)。

②「わたしは、あなたを…」(4-8)

エレミヤが 20 歳頃に主のことばがありました。主は彼を生まれる前から知り、聖別し、預言者と定めておられました。しかし、彼はまだ若く、語るに乏しさを覚え、躊躇しますが、それも主は問題視せず、同行と御守りの約束の下で派遣し、メッセージを伝えるよう命じます。

③主は御手を伸ばし(9-10)

語るに乏しさを覚える彼に、主は触れてことばを授けた、と言い切られます。派遣先は諸国の民と王国で、主がそれらの上におられることを示すことになります。具体的な6つの役割は、先に否定的側面がありますが、その後に回復・再生を促すことも含みます。

Ⅲ　主のことばと私

①主は語られる

公の場でも、密かな面談でも、主は個人に明確に語られます。出来事や物事の流れ・雰囲気は傍証です。ご自身の思いと計画をみことばのうちに示し、導かれます。ですから、「わが主は、何をこのしもべに告げられるのですか」(ヨシュア 5:14)と祈り尋ねるのです。

②主は定められる

主はご計画をもって一人ひとりを造られました。不可避な運命ではなく、信頼と受容をもって各自が受け取るものです。個性や経験も、弱さ・乏しささえも主の御手の中にあり、ご自身の栄光のために用いられます。主のみこころをしっかり受け取っていますか。

③主は授けられる

主は、計画の遂行のためにその人に必要なものを与えてくださいます。悩みや乏しさ、困難が全くないのではありませんが、自分の願望や理想も主の足元に置き、委ね続けるとき、主は常に十分に満たしてくださいます。

＜おわりに＞ 主はみことばをもって今も語り続けておられます。個人的にそれを聞き、とらえて歩むことが神と共なる歩み、信仰生活です。これまでも、これからも主のことばが私に響き渡り、それを受け取って進んで行くお互いでありますように。(H.M.)